

進捗状況の概要（1ページ以内）

学内の実施体制は、学長を機構長とする FD 推進機構のもとに教職協働組織である教育技術開発ワーキンググループ（以下、WG）を設置。同 WG は、AL 導入促進の主体として実施状況・成果の分析、学内研修会開催、事例調査・視察の計画や振り返りを行い、FD 推進機構運営委員会で報告を行うとともに、得た知見を学内に水平展開することを目的に活動している。また、同 WG のもとに授業実施者による「AL 実践研究会」を設置、実践例の蓄積と課題の抽出を行っている。平成 29 年度には、新たに組織された「学生 FD スタッフ」が WG に出席し、授業改善活動についての報告を行うなど、学生が AL 型授業の主体として事業に一部参画していくこととなった。

平成 29 年度において中心となる取組は、①AL 型授業全学展開、② FDer の育成、③クラス・サポーター（CS）雇用、④学生 FD スタッフの活動、⑤能動的な学修態度の評価指標開発、⑥学習ポートフォリオの開発である。

それらの取組の成果は、以下のとおりである。

- ① AL 型授業全学展開：平成 29 年度実績値において AL 型授業数・受講学生数・実施教員すべての割合が目標値である 80%を達成、全学展開の具体的かつ実質的進展が図られた。
- ② FDer の育成：平成 29 年度に新たに 2 名の FDer を認定、合計 5 名となった。これにより、全ての学部 AL 先導役の教員が配置されることとなり、全学展開の条件を整えることができた。
- ③クラス・サポーター（CS）雇用：平成 29 年度 75 名の先輩学生を CS として雇用、事前の合宿研修を経て授業でのピア・ラーニングのファシリテートを中心に活動した。CS 雇用科目の学生満足度はそれ以外の科目と比して高い。
- ④学生 FD スタッフの活動：学生 FD スタッフの役割を「教職員と学生をつなぎ、学びのコミュニティづくりを行うこと」と定義し、教員インタビューや学生・教職員懇談会等の多様な活動を開始した。これにより、教員の授業改善および他の学生への波及効果が期待できる。
- ⑤能動的な学修態度の評価指標開発：主体性を測るルーブリックをキャリア科目の中で試行的に活用、学生が自身の学習に向かう主体性について点検・評価することができた。この結果をもとに学習ポートフォリオ上に「講義の取り組み姿勢」を測るルーブリックとして再作成した。
- ⑥学習ポートフォリオの開発：本学独自のシステムとして主体的学びを促進する機能（ルーブリックによる主体性評価、授業外学修時間の計画・実施、LMS による学びの記録等）を取り入れ、学習成果の可視化に繋がるものとなった（平成 30 年 4 月から運用開始）。

補助期間終了後の継続発展に向けた取組として、教職協働体制の組織的枠組みを維持し、その中心的な役割である教育技術開発 WG の活動を継続するとともに、FDer は永続的な職責として認定を継続、CS も補助期間内と同様に雇用を行う予定であり、もって AL 型授業の定着を図ることができる。また、学生 FD スタッフの活動を定常化させることにより、学生および教職員の意識改革が進展し、AL の実質化に繋がっていくことが見込まれる。

学内外への波及効果として、学内で AL 型授業の新たな展開として地域の課題を解決する PBL 型授業の取組が開始された。また学外へは近隣高等学校から高大接続の視点で大学ではどのような AL を実施しているか知りたいとの要望があり、高等学校教員や高校生が授業見学に来るなどの事例があった他、他大学との連携関係において AP 採択校同士での情報共有、事業改善を目的に合同シンポジウム開催の企画があがっている（芝浦工業大学、大阪工業大学、福岡工業大学、H30. 10. 26 開催予定）。